

「太陽の道」は倭王の居所を指し示す

長谷川 宗武

要旨

福岡都市圏にある三つの弥生遺跡〈須玖岡本遺跡・吉武高木遺跡・三雲南小路遺跡〉とそのそばにある三つの神社〈熊野神社・飯盛神社・細石神社〉は、驚くべき精度で東西に直列するという事実に基づき、「その場所に原初の国家が形成され、春分・秋分・夏至・冬至の日の出を礼拝する祭場であった」という「太陽の道」仮説を提起する。第二の仮説は、「古墳時代以降の新しい「太陽の道」は、太宰府の大城山南のふもとを祭場とするように制定しなおされた」というものである。この講演では、上の二つの仮説を説明し、「太陽の道」の焦点には王がいたと論じる。そして、「太陽の道」の焦点は歴代中国史書の記述する倭国中心部に一致することを示す。このアプローチが、「倭の五王は何処にいたか」という問いに、外堀を埋めていくようにして答えに導く。

0. 「太陽の道」というアイディア

1980 年 2 月 11 日 NHK スペシャルが「謎の北緯 34 度 32 分をゆく」という番組を放映しました。関連する番組がいくつか放映されたと記憶します。たいへん興味を覚え、番組のディレクター水谷慶一の著書『知られざる古代 謎の北緯 34 度 32 分をゆく』（日本放送出版協会 1977 年）を読みました。そこで「太陽の道」という言葉を知ったのです。その本によれば、北緯 34 度 32 分に注目しこの言葉を初めて使ったのは、小川光三著『大和の原像 知られざる古代太陽の道』（大和書房 1973 年）ということです。ちなみに、古田武彦著『「邪馬台国」はなかった』（朝日新聞社）が出版されたのは 1971 年のことでした。

NHK の番組が放映されたころには、わたしも古田武彦さんの著書をみな読んでいましたから、「太陽の道」という言葉を古田さんの視点から見たらどうなるか、という考えが浮かびました。そこで、国土地理院の一番詳細な地図を買っていろいろ調べてみました。見つかったのは、次のスライドで示す沖ノ島と沖縄久高島がまさしく「太陽の道」上の特別の島だったということです。もう一つ見つかったのは、宇佐宮が太宰府の真東に、宗像大社が太宰府政庁跡の真北にあるということです。北緯 34 度 32 分は三輪山が伊勢斎宮や伊勢湾の神島と東西に直列するという事で注目されたのですが、宇佐宮に対して太宰府の東方で目立つ大根地山を基点と考えれば、宇佐宮—大根地山—福岡市油山夫婦岩が伊勢斎宮—三輪山に匹敵する精度で東西に直列するのです。二つの神社宇佐神宮と宗像大社が太宰府を指し示すことは偶然ではない、と思いました。しかし、このアイディアは 35 年以上、頭の隅にさなぎのように眠ったままでした。

ところが、2017 年秋にバス・ツアーで宇佐宮を通過して和氣清麻呂の「船つなぎ石」の案内板を見たとき、昔のアイディアが眼を覚まして今日お話しする考えに発展したのです。

I. 日の出・日の入りが指示する「太陽の道」

「太陽の道」という考えが学問的に意味をもつと確信したのは、福岡都市圏の三つの弥生遺跡が驚くべき精度で東西に直列することを発見したときです。コンピュータ関連の技術の進歩のおかげで21世紀の探索は新しい様相のものとなりました。インターネット上の国土地理院の地図は電子化されて、地理についてははるかに精密な考察を促します。以下、その探検を、順を追って説明していきましょう。

「世界遺産」めぐりということになりますが、最初のスライドで訪れるのは“神宿る島”沖ノ島および首里城・斎場御嶽です。ただし、世界遺産ではない久高島が“神宿る島”です。

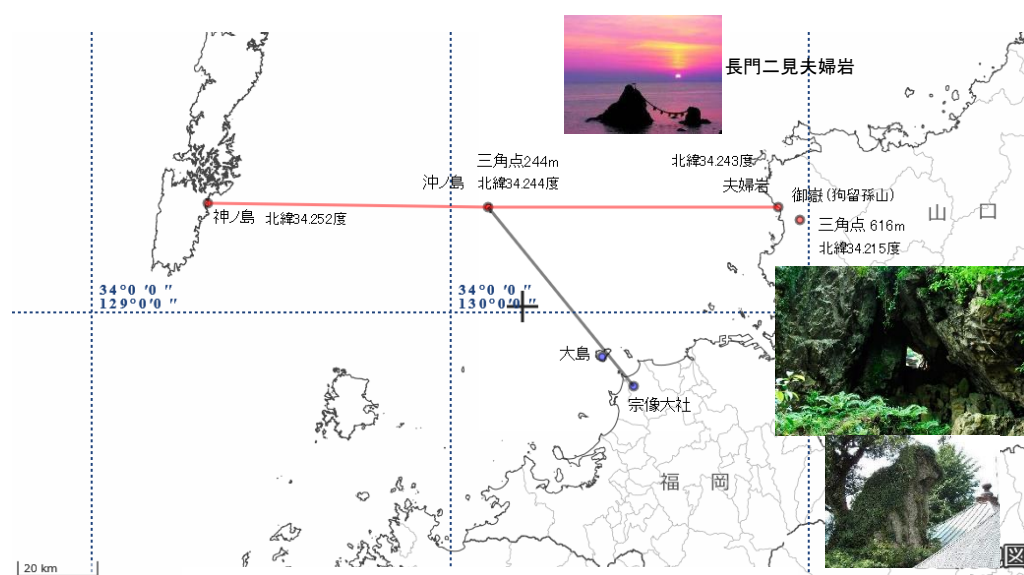


図 1.1 「太陽の道」の祖型 夫婦岩—沖ノ島—神ノ島



図 1.2 「太陽の道」の発展形 久高島—首里城正殿—神山島

- ① 「太陽の道」上に王の住まい（王宮）と祭祀の場所があった
- ② 王家の女性「聞得大君(きこえおおきみ)」が卑弥呼やのちの斎宮のように祭祀を司った
- ③ 制度が整った時代には王宮の入り口に漏刻が置かれた

漏刻門



II. 弥生時代に福岡都市圏で形成された初期国家と「太陽の道」

飯盛神社はいまでは飯盛山のふもとにあります、吉武高木遺跡の発掘調査は、墓地のすぐ近くに王たちの住居があり、祭祀の場所もそこにあったと推定させます。その三種の神器が出土した木棺墓は列島最古の王墓と目されています。しかも、飯盛神社では、古代から東北東にある若杉山のイザナギを祀る太祖神社と対で存在したと伝承されています。三雲南小路遺跡そばの細石神社から夏至の日の出の方角にある高祖山には高祖神社があり、祭神はニニギとコノハナノサクヤヒメとのあいだの子ヒコホホデミです。福岡都市圏でも最重要な三つの弥生遺跡で祀られている神々は、日本神話の最重要な神々だったことが分かります。つけ加えれば、大宰府の東方にある大根地山の大根地神社に祀られている神々

は、イザナギ・イザナミから七代の天神と日神・その子・孫ニニギ・ひ孫ヒコホホデミ・玄孫ウガヤフキアエズまで五代の地神です。神話の体系化が進んだことを示しています。

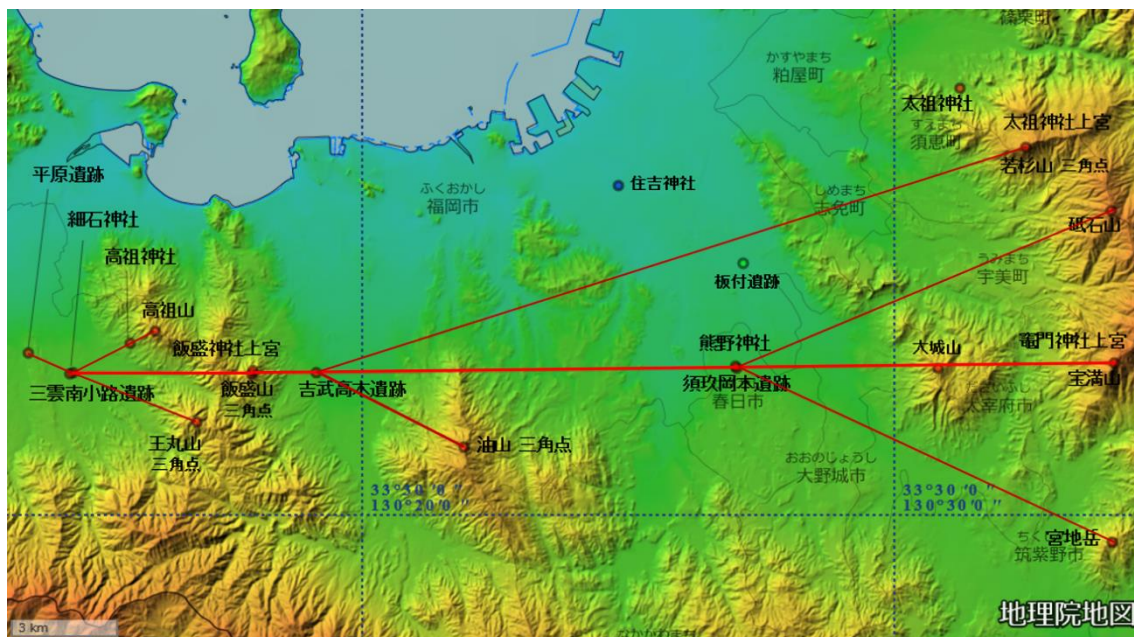
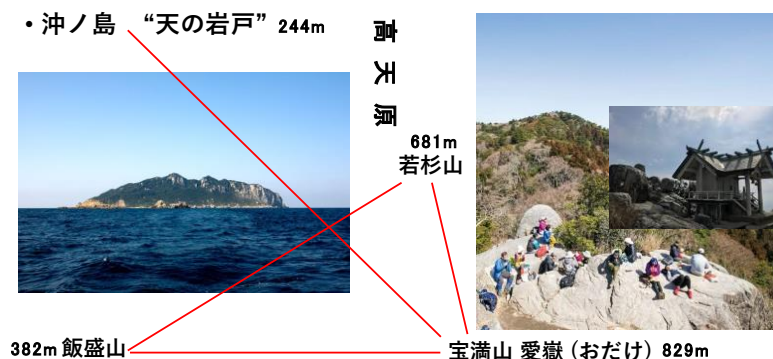


図 2.1 福岡都市圏にあった弥生時代の「太陽の道」

以上のことを次のような結論に要約することができるでしょう。

- ① 列島古代の最先進地域である福岡都市圏で高天原の神々の信仰が生まれ「太陽の道」が崇拝されたこと。
- ② 春分秋分・夏至・冬至の日の出を拝むのに適した“焦点”とも言うべき場所で、共同体が原初の国家に発展し王権が生まれたこと、それは三つの弥生遺跡が東西線上に直列していることによって知られる。
- ③ ほとんど同一緯度線上にある宝満山と飯盛山が「太陽の道」を指定する神聖な山と考えられて、その東西線上に三つの“都市国家”が築かれたこと。
- ④ 三つの弥生遺跡の場所は㊶神々と太陽神の祭祀の場所であり、㊶近くに王の住まいがあり、㊶墓も近くにあったこと。

詳細は谷川修(ペンネーム)著『倭国はここにあった 人文地理学的な論証』に譲ります。



Ⅲ. 発見された「太陽の道」が開く歴史解釈

図 2.1 は、古田武彦さんが半世紀前に提唱された「弥生時代の倭国の中心部はこの地域にあった」という考えに導きます。

この問いはずっと頭の隅にありましたが、「漢委奴国王」金印はなぜ志賀島のあの場所で発見されたかと問うてみましょう。図 2.1 を志賀島まで含むように拡張して、金印出土地を書き入ると図 3.1 のようになります。すると、あの場所からなら「太陽の道」を指定する神聖な山々を一望できることが分かります。しかも、最も神聖な宝満山が真東から南に約 29 度の方向にあるのです。冬至の日に宝満山から昇る日の出を拝むことができるでしょう。さらによく見ると、その場所のもう一つの神聖な山飯盛山の真北にあることが分かりました。調べてみると、金印が出土したのは江戸時代のことで、いま「漢委奴国王金印発光之处」記念碑が立っているところは推定された場所なのです。のちに調査をした人たちは、博多湾入り口の西側が見える場所ではないかと結論したようです。ところがそちらの場所だとすると、神聖な山々を見渡すことができません。どの場所だったかは正確には判明していないのですが、グーグル・マップであのあたりを拡大して地形を観察すると、石碑の立っている場所よりもわずかに西側の方が耕作地だった形跡を留めています。そして、そちらの方がいっそう飯盛山の真北に当たります。そこで拙著では、そういう場所を金印出土地として仮定しています。

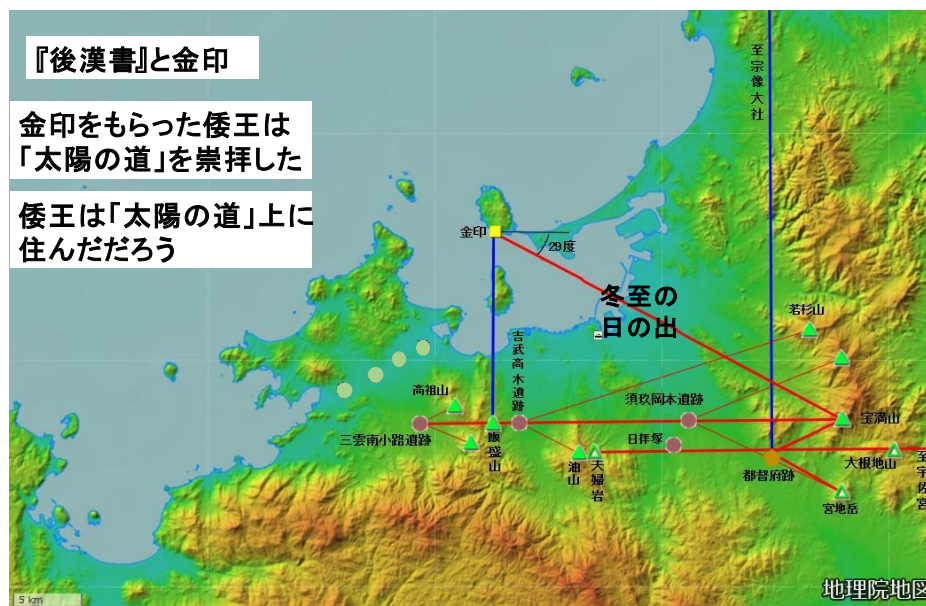


図 3.1 「太陽の道」を指定する山々と金印出土地の地理的關係

さて、いずれにせよ金印出土地あたりから冬至の日に日の出を見ると、次の図 3.2 で示ようになります(この図は、杉本智彦作成ソフトウェア「カシミール 3D」を用いて描きました)。金印といっしょにあの場所に葬られた人があるとすれば、その被葬者はたしかに冬至の日の出を拝むことを望んだ、と考えることができます。そして、「太陽の道」上にあった三つの弥生遺跡のどこかに住んでいただろう、と推定することでできます。

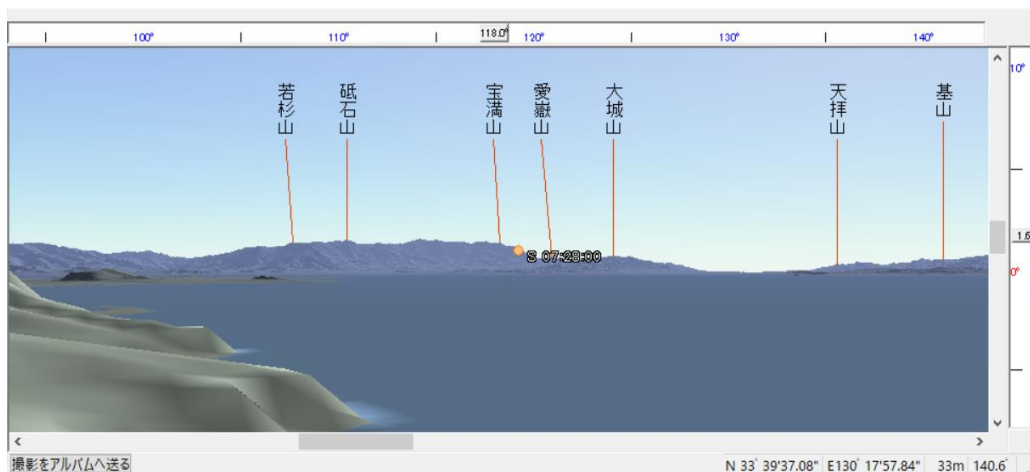


図 3.2 金印出土地から冬至の日の出を見る

この見方は孤立したものではありません。図 3.2 によって、時代は遅れますが統一新羅の文武王がどういう場所に葬られたかを知れば、納得がいきます。新羅の王都金城(現代の慶州)郊外の吐含山には新羅の重要な仏教遺跡があります。その一つ石屈庵は石造りの見事な寺院ですが、冬至の日の出の方角へ向いていて、中心となる如来像の額に埋めこんである石が朝陽を浴びて光るそうです。その冬至の日の出の方向には何があるのでしょうか。文武王の墓地として海岸の沖の岩礁が選ばれたのです。

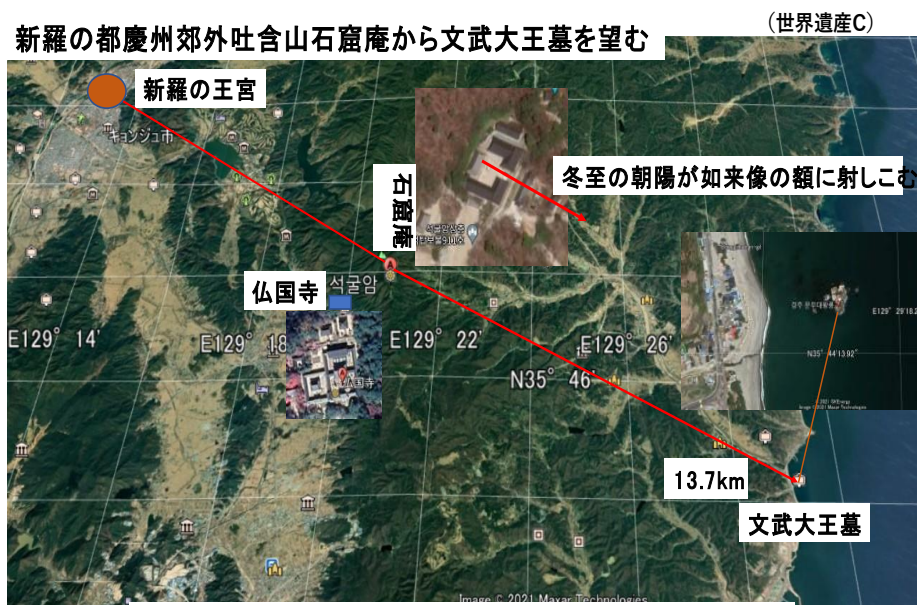


図 3.2 新羅王都-郊外の石窟庵-文武王墓との地理的關係

こうして、前節で考察した「太陽の道」が崇拝された地域の王が、漢を再興した光武帝の時代に使節を派遣した、と結論できるでしょう。『後漢書』は、次の世代の王を「倭王」と書いていますから、図 3.1 の示す地域がその時代の倭国の中心部なのです。

続いて『三国志』「魏書東夷伝」が記述した倭国を考えましょう。すでに古田さんによって詳細に議論されていて、卑弥呼のいたところがどこかほとんどつけ加えることがないほどですが、地図を用いて視覚的にはっきりさせましょう。邪馬壹国が帯方郡から 12000 里のところであり、朝鮮半島の南東海岸部まで 7000 里で残りが 5000 里ということは明確に記されています（7000 里や 5000 里は一けたの概数表記ですから、残余の距離 1500 里は大きな誤差を含むと考えてください）。ところで、距離は今も昔も基準単位の長さの何倍かすなわち相対比で表現します。たとえその基準単位が確定的でないとしても、この問題では帯方郡から邪馬壹国までの行路がくわしく記述されているのですから、相対距離を実際の地理に適用すれば、図 3.3 に示すように邪馬壹国がどの範囲にあるかまぎれもなく確定できます。この地図で、邪馬壹国が奈良盆地にあったと主張する余地はありません。

伊都国からの行程も実際の地図上で解釈すべきです。魏使は九州島に上陸して東方に進んでいますから、図 2.1 や図 3.1 で分かるように背振山脈の南側をめざしているのではありません。伊都国から東に進んで最初に開けた平地博多湾南が最有力な候補地であることが分かります。そして、考古学的な知見からすれば、図 3.3 の赤い円内に、200 年代中期に須玖岡本周辺よりも栄えた有力な地域はほかにはないので、邪馬壹国が須玖岡本あたりにあったというのが最も蓋然性の高い結論ということになります。すなわち古田さんの結論です。



図 3.3 邪馬壹国は赤い円の範囲にあった

本稿の「太陽の道」という観点はその結論をさらに強固にします。ここまでの考察に基づけば、図 3.1 の示す三つの弥生遺跡が「太陽の道」崇拝の祭祀を行なう初期国家の中心的都市で、この地域が弥生時代の倭国中心部だったことは動かさないでしょう。『三国志』「魏書東夷伝」は邪馬壹国の女王卑弥呼は「鬼道」に使えると記し、王家の独身女性である斎宮や聞得大君のような太陽崇拝の祭祀を司る人だったと推定させます。ですから、卑弥呼が三つの遺跡のいずれかにいたことは確実だと考えられます。そして、考古学的発掘調査は、

200 年代中期に最も栄えたのは須玖岡本周辺だと教えるのです。だから、卑弥呼は須玖岡本にいたと結論できるでしょう。

こうして、弥生時代の倭国の中心部が図 3.1 の「太陽の道」を崇拝する地域にあったことが確実にになりました。

IV. 古墳時代に制定された新しい「太陽の道」

最初の方で、35 年以上前に、太宰府を真東から宇佐宮が真北から宗像大社が指し示していることに気づいたと話しました。偶然では起こりえないそのようなことがなぜ現実を観察できるのでしょうか。二つの神殿は古墳時代に創建され、太陽崇拝に関係していると考えられますから、この時代に「太陽の道」を設定しなおしたのではないか、というのがわたしに浮かんだアイディアです。小川さん水谷さんの北緯 34 度 32 分の「太陽の道」は、三輪山から伊勢斎宮まで東西線をたどって測量して決められたと論じています。すると、太宰府でも基点になる山から宇佐宮まで測量したと考えることができます。じつは前からそういう山は太宰府の東方に見える三角形をした大根地山だと目星をつけていました。

インターネット上の地理院地図で測ると、宇佐宮と大根地山が、三輪山-伊勢斎宮に匹敵する驚くべき精度で東西線上に並ぶことが確認できました。それだけではありません。こちらでは、その東西線の延長上に興味深い「磐座(いわくら)」が見つかりました。福岡市の南にある油山の夫婦岩です。山にあるのに長門二見の夫婦岩と同じ名で呼ばれているのです。そして、自然の偶然ではあるけれども、大根地山と油山の夫婦岩は、宝満山と飯盛山のように、ほとんど同一緯度とすることができるほどなのです。そのことは古代人に強い印象を与えたでしょう。この東西線を新しい「太陽の道」とする考えが生じてもおかしくありません。農地の開発や政治の高度化によって社会が発展し、政治の中心を須玖岡本付近よりも広くて立地のよい太宰府へ移す政策は合理的と言えます。この考えは、大根地山山頂にある大根地神社の祭神を知ってほとんど確信に変わりました。そこには、イザナギ・イザナミからからの天神七代と日神・アメノオシホミミ・ニニギ・ヒコホホデミ・ウガヤフキアエズの地神五代、すなわち日本神話の主系列の神々がそろって祀られているのです。時代の進展が神々の信仰をいっそう体系化させたことが見てとれます。そう考えて太宰府を焦点として「太陽の道」を構成する標識になる山々を探すと、須玖岡本遺跡・熊野神社の場所よりもふさわしいと見えます(人はこれを風水と言いますが)。新しい「太陽の道」が設定されたと考えてよさそうです。

図 4.1 にそれを示しましょう。弥生時代の「太陽の道」の霊山筆頭の宝満山は今度は夏至の日の出の方向の標識で、冬至の日の出の標識だった宮地岳は今度も冬至の日の出が昇る山です。図 4.1 には、春日市の須玖岡本遺跡から南西方向の場所にある日拝塚(ひはいづか)古墳を書き入れています。この古墳は、全長 46m ぐらいでこの地域最大の前方後円墳です。漢字を使用し始めた証でしょうか、日本語としてはこなれない表記・読み方ですが、春分・秋分の日はこの日拝塚古墳から日の出を拝めば大根地山山頂から昇るのが見え

古墳時代に新しく設定された**太陽の道**



図 4.1 大根地山-油山夫婦岩を結ぶ新しい「太陽の道」

る、と言われてきました。ごく最近になって先ほど紹介したソフトウェア「カシミール 3D」を使えるようになったのでそれを用いて描いてみました。それが図 4.2 です。この印象深い図は、日拝塚古墳の被葬者が春分・秋分の日の出を拝むことを願ったことを教えてくれます。古墳時代に大根地山が新しい「太陽の道」の霊山になったにちがいありません。

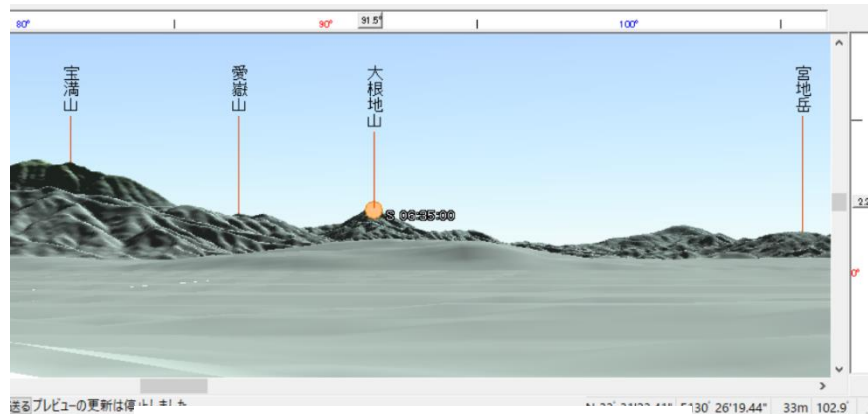


図 4.2 日拝塚古墳から見た春分・秋分の日の出

図 2.1 に示された弥生時代の「太陽の道」は、古墳時代に図 4.1 のように、少し南の太宰府を焦点とするように移されたことになります。それを整理して表わせば図 4.3 のようになります。ここには沖ノ島を通る始原の「太陽の道」も含めました。この図は九州北部と本州西端しか含みませんが、太宰府が、北の海に開ける交通の要衝である博多湾だけでなく南の筑後川流域をにらんで、さらにその先へも支配を広げるのに適した場所だということが分かります。弥生時代の「太陽の道」に倭国の王がいたように、古墳時代の「太陽の道」の焦点太宰府にも倭国の王がいた、と考えることができます。

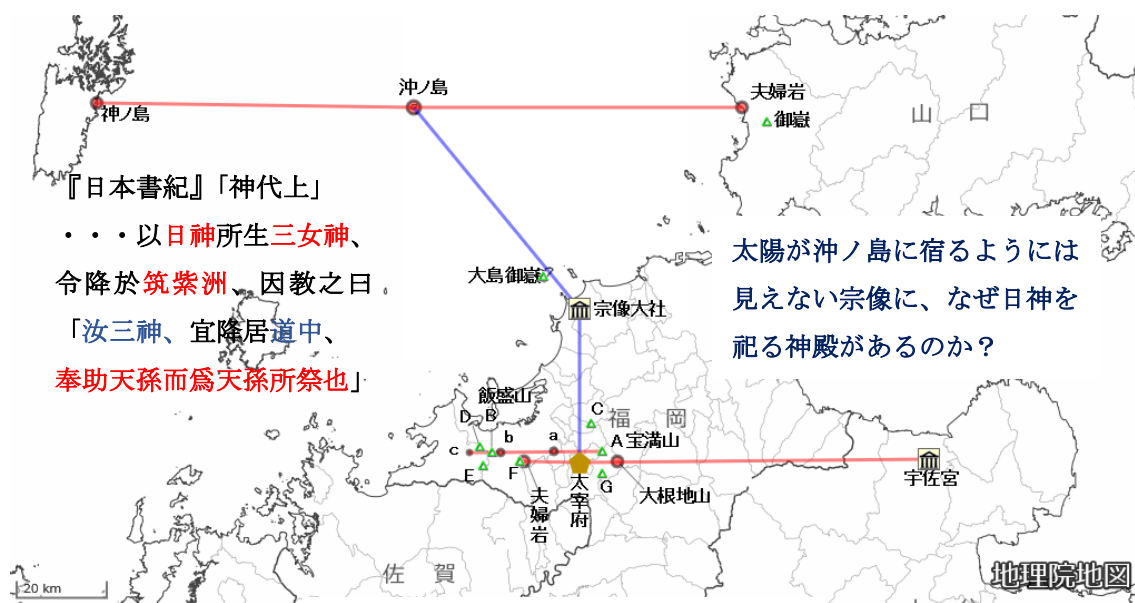


図 4.3 九州北部にあった3つの「太陽の道」

それは、太宰府政庁跡の正中線の真北に日神が宿る沖ノ島を礼拝する宗像大社があることが証明している、とわたしは考えます。宗像大社には図中に示した神勅が掲げられていますが、遠い大和の王家がそうしたとは考えられません。宗像大社から見て太陽が沖ノ島に沈むことはないのに、そこに礼拝所を創建したのは、その真南にいる王だったはずです。『日本書紀』の「一書」は、日神の娘三女神は初め宇佐に降りたけれども、のちに宗像に行ったと書きます。宇佐宮は日神礼拝の最初の神殿だったのです。そして、「一書」は筑後の水沼の君も三女神を祀ると書きます。その視点が三方を見渡す中心太宰府にあることは明らかです。『日本書紀』の編者はやろうと思えば、奈良盆地のどこかでも三女神を祀ったと書くこともできたでしょうがそうはしませんでした。宇佐宮と宗像大社を建てたのは太宰府にいた王で、古い時代のことだったのです。この神話が付加されたのも、太宰府を通る「太陽の道」の設定された古墳時代だったでしょう。それ以後後世までそこに王がいたことを示す論拠をまだまだ挙げるができるでしょう。

この見方に反して、太宰府の王よりも権威ある王がほかのところにいたでしょうか。真っ先に思いつく候補は<大和>の王です。そこで、王の宗教的な権威を象徴する「太陽の道」のようなものが<大和>に存在したかが問題となります。ところで、最初にお話ししたように、「太陽の道」という言葉に出会ったのは、奈良盆地の三輪山あたりと伊勢斎宮を結ぶ東西線についての議論でした。そこではそれが由緒の古いものと論じられていました。しかし『日本書紀』を読めば、伊勢斎宮がつけられたのは天武王の時代 670 年代だということが分かります。福岡都市圏の弥生遺跡や古墳時代以後の太宰府を焦点とする「太陽の道」の方がはるかに古く歴史を経たものだったし、日本神話の信仰体系がそれと不可分なものとして形成されたということも示しました。したがって、日本列島での王の権威について、

太宰府の王権が〈大和〉の王家よりもずっと古い伝統と権威をもつものだったことは明らかです。図 4.4 に〈大和〉の王家が制定した「太陽の道」を図示してみましょう。

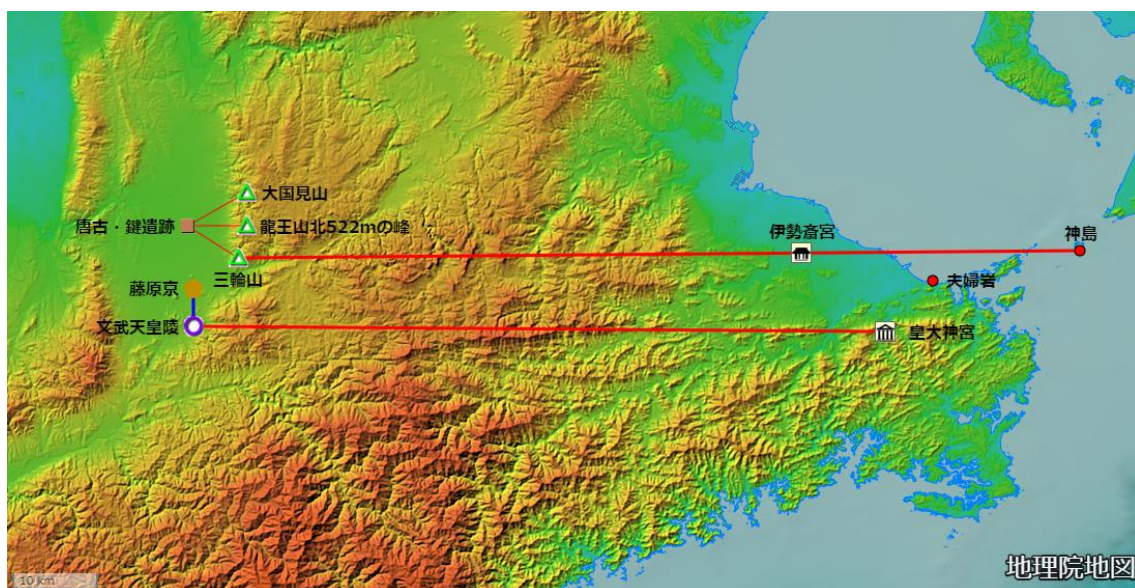


図 4.4 〈大和〉の王権が制定した「太陽の道」は天武王以後

上のことに加えて、図 4.3 と図 4.4 の地理的関係を比較しても、三輪山-伊勢斎宮-神島の直列が油山夫婦岩-太宰府-大根地山-宇佐宮の直列をモデルとして設定されたことが明らかです。「太陽の道」というシンボル形式を取り入れるのに、〈大和〉の王家は太宰府の王権のやり方を見倣ったのです。ところが、小川さん水谷さんは、伊勢神宮というとき王家の宗廟としてより重要な皇大神宮に注目しませんでした。場所を移された皇大神宮こそ大事な神殿でここを通る「太陽の道」があるはずだと考えて探したら、それが見つかりました。これまた驚くべき精度で皇大神宮の真西に文武天皇陵があることが分かったのです。しかも、文武天皇陵は藤原京宮殿中心線と朱雀大路の延長上の真南にあるのです。皇大神宮と文武天皇陵を結ぶ東西線こそ、〈大和〉の王権が制定した「太陽の道」だったのです。

そうすると、〈大和〉の「太陽の道」は文武天皇陵を結節点として藤原京に関連づけられているのですから、それが制定されたのは奈良盆地で画期的な藤原京よりもあとで文武天皇の時代ということになります。これは重大なことを証しているのです。すなわち、文武天皇以前は、油山夫婦岩-太宰府-大根地山-宇佐宮を結ぶ「太陽の道」がこの列島で唯一の権威あるものだったということです。したがって、図 4.3 と図 4.4 は、文武天皇以前（拙著『日本国はどのようにして成立したか 王朝交代規範からの推論』で論じたように、文武王が天皇位に就いて元号「大宝」と「令」を發布する以前）、列島にただ一つの「太陽の道」を主宰する太宰府の王が権威ある王だったことを証言しているのです

こうして、「太陽の道」の視点から、中国南朝の史書が記述する 400 年代の倭の五王は太宰府にいたと結論できます。

V. 『隋書』は倭国王が九州北部にいたと告げる

『隋書』と『旧唐書』がその時代の倭国のことを記述していて、倭国が奈良盆地にあったのではないことを半世紀も前に古田武彦さんが論じていますから、中国史書の方からこのことに付け加えることはほとんどありません。わずかに谷川修著『日本国はどのようにして成立したか』で倭国からのちの日本国への移行について、二、三の論点を補足しました。そのうち倭国の都の所在について、地図で示しておきましょう。魏使が倭国に来て以来久しぶりに隋使が倭国に来て、その地理を記述しています。倭国の大局的な位置について、『隋書』「東夷伝」の記述は『三国志』「東夷伝」をなぞっているだけのように見えますが、よく見ると隋の時代の認識を記していることが分かります。それを図 5.1 に示します。

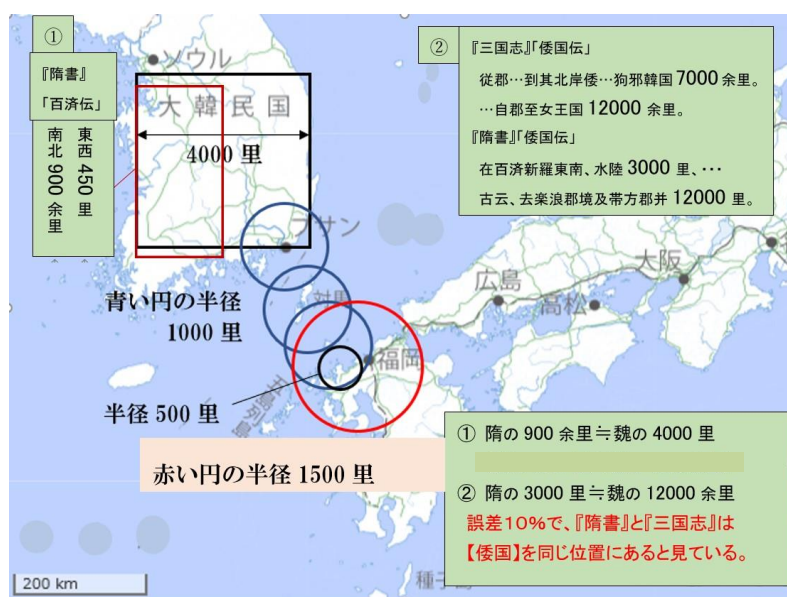


図 5.1 『隋書』の百済と倭国の地理記述

『隋書』「百濟伝」は『三国志』が韓について 4000 里としている南北の距離を 900 余里と表現し、『隋書』「倭国伝」は『三国志』が帶方郡から 12000 余里としているのを 3000 里と表現しています。ここに示されている数字は 1 桁の概数ですから、隋の 1000 里が誤差 10% 程度で魏の 4000 里に当たると理解してよいのです。先ほど言ったように距離は相対比で表わすのが原則ですから、実際に倭国にきた隋使は、十分合理的に、倭国の中心部がどこにあるかについて魏使と同じ地理認識をしている、とすることができます。

「太陽の道」の観点から古墳時代以来倭国王は太宰府にいたと結論しましたが、『隋書』も、600 年代初頭の倭国王が九州北部のかつての耶馬壹国付近にいるという認識を示しています。中国史書は 200 年代中期と 600 年代初頭の倭国王はほぼ同じ場所にいると言っているのですから、400 年代にも倭国王が同じ地域にいた、と考えてよいでしょう。二つの異なるアプローチが、倭の五王は太宰府にいたという結論へ導くのです。これで、「倭の五王は何処にいたか」という問いに答えることができた、と思います。